第２９期（111号～113号）会計報告　2025年5月31日現在

収入の部		
前期繰越金（29期以降分の前納18人を含む）		577,665円
今期収入		
会費収入（延べ56人分）	214,000円	
内訳　第28期　10人、第29期　26人、第30期以降前納　20人		
寄付		75,700円
買い取り（含バラ売り、抜刷り）		235,800円
		小計525,500円
収入計		1,103,165円
支出の部		
年間制作費（含送料・消費税）		
内訳 111号製作		100,862円
112号製作		102,844円
113号製作		102,244円
発送費（111号～113号）、事務・通信・DTPソフト・諸雑費		90,251円
支出計		396,201円

収入 ― 支出＝1,103,165円 ― 396,201円 ＝ 706,964円
次期繰越金（30期（114号～115号）以降前納　20人分を含む）
（＝預貯金口座705,662円＋ 現金1,302円）

編集後記

◎本114号では29期会計を報告します。29期は111～113号の３冊発行となりました。今期は発行数が３冊なだけでなく、発行期間が一年では間に合わず一年半を要してしまいました（111号の会計報告は２０２３年10月）。原因はこのところ常に訴えている入稿数の減少です。会員数は現状維持を保っており、支出についても発行３冊であれば収入で賄えるので、予算面での不安は今のところありませんが、原稿が届かないと発行を進められない状況が続いています。現状の投稿数では、雑誌刊行の維持が困難と考えております。古代史の海をお読み頂いている方であれば、古代史の学説に対する意見や自らの検証をされていると思います。会員諸氏におきましては、是非、それらを文章化して、原稿として投稿いただけるようお願い申し上げます。（河越）

◎今回、長めの論文が二編投稿されました。通常ならば分載をお願いするべきところですが、投稿論文は大きく減っており、今回

は二編のみでしたので、「会員広場」への投稿と合わせて二編とも掲載することにしました。六四頁を少し超えてしまい、制作費が少し嵩むこととなりましたが、ご了承ください。論文の分載はできれば避けたい。読者側からすれば、前の論文の内容を思い出すだけで一苦労だからです。

◎大坪論文は、以前論文集にまとめられた論文の一つ百済王氏の交野移住について、最新の研究を取り入れられた修正論文です。今回、大変緻密な、考古学の成果も多く入れての修正版を、本誌にご投稿いただきました。三浦論文は、月次祭の夜、天皇が中和院内の神嘉殿にて神と共食するという「神今食」について、詳細な考察を加えた力作です。

◎河越編集委員の編集後記にもありますように、投稿数が大幅に減っております。中村前編集長から本誌を引き継いだとき、既に漸減傾向にありました。八五号からは、雑誌名から「季刊」を外さざるを得なくなりました。それでも年四回発行のペースは保っておりましたが、投稿数は増えることはありませんでした。編集部として依頼原稿も行いましたし、寄贈している研究者の方々にも投稿を呼びかけました。それが功を奏したのか、一時は結構集まったと思います。しかし漸減傾向は続き、年四回の発行が、ここ最近は年三回となり、一昨年はとうとう年2回となりました。会員数は五〇名強。投稿に頼る雑誌を維持する人数としては極限でしょう。会計的には、一回発行するのに一〇万円強＋諸経費三万円ほどで、会費収入だけみると単年度決算では赤字ですが、繰越金が多少あることと、執筆者に買い取っていただいている分と寄附によって赤字にはなっておりません。会費と繰越金、寄附、買い取り分を合わせれば年3回発行でも十分可能です。問題は会計的なことではなく、発行回数を年2回に減らしても、雑誌の中身を構成する投稿がコンスタントに確保できるかどうか、なのです。会員数五〇人では必要な投稿数の確保が難しいというのが、ここ最近の編集での感想です。

◎多くの歴史雑誌が廃刊していく中、『古代史の海』誌はしぶとく生き残ってきました。それは会員の投稿があったからこそです。まだ投稿が完全に尽きたわけではありませんが、年2回出すためには、少なくとも年七本から一〇本くらいの投稿数が必要です。今後それだけの論文が集まるかどうか、先が見えません。残念ですが『古代史の海』誌も、そろそろ終刊を見据えなければならない時期がきたと思われます。編集部では、今後の投稿状況にもよりますが、次々号（一一六号）を以て終刊とすることを考えております。したがいまして、来期は会費の徴収はいたしません。もしお手元に未発表の原稿をお持ちの方は、お早めにご投稿をお願いします。（上遠野）